大学生の欠席過多に関連する諸要因

蔵本信比古　　穴田　有一
棚橋　二朗　　三浦　　洋
北海道情報大学

Factors of Excess Absence of University Students

Nobuhiko KURAMOTO, Yuichi ANADA, Jiro TANAHASHI
and Hiroshi MIURA
Hokkaido Information University

平成24年11月

北海道情報大学紀要　第24巻　第１号別刷

〈報　告〉

大学生の欠席過多に関連する諸要因

蔵本信比古*・穴田有一*・棚橋二朗*・三浦洋**

Factors of Excess Absence of University Students

Nobuhiko KURAMOTO*, Yuichi ANADA*, Jiro TANAHASHI*, Hiroshi MIURA**

要　　約

欠席過多の要因を検討するために，本学学生の学生生活に関する実態調査を行い、本紀要前号(第 23 巻 2 号)において報告を行った。紙幅の都合から割愛せざるを得なかった GHQ12(精神健康調査)、大学嫌い感情測定尺度の結果について報告するとともに、調査した全項目をもとに欠席過多に影響を及ぼす要因について検討を行った。その結果、就学関連，生活関連，健康関連その他の事項が幅広く関与していることが明らかになった。一方で、精神的不健康など、健康面の関連指標については関与が明確でなかった。

キーワード：学生生活，欠席過多

【目的】

大学生の授業の欠席過多は、留年、休退学につながる就学上の大きな問題である。このことについて、市来ら(2008) [1]、最上ら(2008) [2]は「欠席過多対策プロジェクト」として全学的なシステム構築を試みている。また、河野(2010) [3]は欠席過多傾向のある「気になる学生」に対し個別面接を中心とした専門的な支援の効果を示している。一方で、不登校学生の把握に関しパーソナリティの面からの類型化も行われている（松田,2009）[4]。しかしながら、欠席過多には個人の内的な問題にとどまらず、より多面的な要因が関連しているものと考えられる。本研究では、本紀要前号に報告[5]した基礎的調査の結果、およびいくつかの追加的資料を提示するとともに、就学関連，生活習慣関連，心身の健康関連の各事項が欠席過多に影響を及ぼす要因の検討を行う。

【方法】

(1) 調査の実施：本学１年、２年次に在学する学生 918 名を対象として、2010 年 11 月に実施した。671 名から回答があり（回収率 73.1%）、このう

*　経営情報学部 Faculty of Business Administration and Information Science
**　情報メディア学部 Faculty of Information Media

ち欠損値のあるもの等を除外し、645件を検討の対象とした（男442名、女86名、性別不明4名）。調査項目は、基本属性6項目，大学生活8項目，就学状況14項目，経済状況12項目，心身の健康14項目の計54項目(既報告済)に加え、心身の健康関連事項としてＧＨＱ12項目短縮版（福西,1990）、学校嫌い感情測定尺度（古市,1991）から10項目を加え作成した。

(2) 定義および分析：出席率60%未満の学生を「欠席過多群」、出席率60%以上の学生を「標準群」とした。欠席過多学生は47名(7.3%)、その他の学生は598名(92.7%)だった。この2群間の比較は、順序尺度の場合はMann-Whitneyの U 検定を、間隔尺度の場合は t 検定を用いた。探索的調査であり検討の幅を広げるねらいから、通常の $p<.01$、$p<.05$ の有意水準に加え、$p<.10$ を有意傾向として記載した。また、違いの見られた項目をもとに重回帰分析を行った。なお、質問紙では出席率を「１．80%以上」から「５．20%未満」まで5段階で回答を求めたが，この場合は得点の大きさが出席率の高さを表すよう逆転処理を行った。他の項目についても，各項目の得点の大きさが項目内容の高さ（強さ）を表すよう同様の処理を行った。

(3) 統計処理:SPSS19.0を使用した。

【結果】

(1) 就学関連：「学生生活への満足」「総合的魅力度」ともに欠席過多群の得点が低かった(それぞれ $U = 10845.5, p<.05$; $U = 10335.5, p<.01$)。欠席過多群のうち「休退学を考えたことがある」のは18名(38.3%)であり、標準群の89人(14.9%)より有意に多かった($U = 10735.5, p<.01$)。また、欠席過多群は標準群と比較して、「授業内容の理解」がより十分でなく($U = 10160.5, p<.01$)、また「卒業後の進路」についてより明確でなかった($t(636) = 1.64, p<.10$）。一方で、性別、所属学部、住居形態、通学時間による違いは見られなかった。

(2) 生活関連：欠席過多群は標準群と比較して、「睡眠時間」が短く($U = 1088.5, p<.01$)、「朝食の摂取」について欠食する傾向が見られた($U = 11236.5, p<.10$)。経済状況、アルバイトの有無、部活・サークルへの参加の有無、親しい友人の数（学内、学外別）については違いが見られなかった。

(3) 健康関連：「身体面の健康」「精神面の不安や悩み」「親しい友人」については、いずれも違いが見られなかった。また、「親しい友人」についても同様であり、欠席過多群がとくに孤立傾向を示しているとはいえない。

(4) ＧＨＱ12項目短縮版：ＧＨＱ（精神健康調査）は、一般住民の精神保健のスクリーニングのため広く用いられているものである。福西(1990)によるとスクリーニングとしての使用時には4件法の片側2件のみを得点として、カットオフは12点満点の4点/5点であった（図1）。しかし、今回

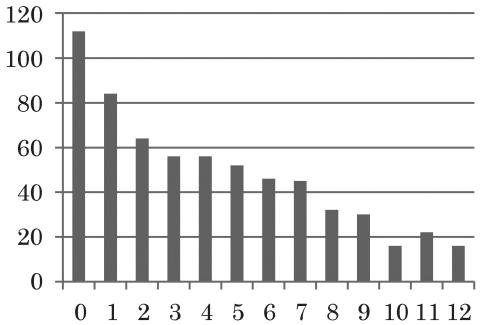

図 1. GHQ-12(福西採点法による)

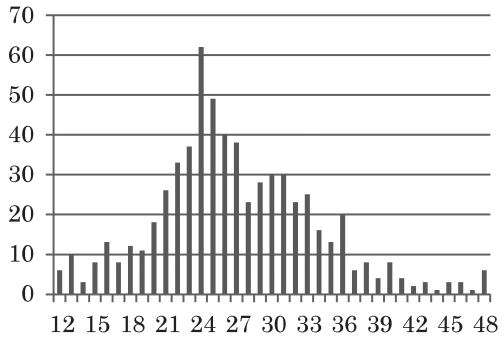

図2. GHQ-12 得点分布

は抑うつ程度の指標として用いるため、4 件法をそのまま得点として加算し、48 点満点として用いた（図 2）。表 1 に示すとおり、欠席過多群はＧＨＱ12 による精神的な不調がより高く（t (628) = 2.267, p<.01)、精神的な不調の存在が推測された。

表 1　GHQ-12 得点

	標準群	欠席過多群	
	平均値（SD）	平均値（SD）	
GHQ-12 得点	26.75 (6.84)	29.56 (6.29)	p<.05

(5) 学校嫌い感情測定尺度：学校ぎらいについて回答を求めたところ、欠席過多群は標準群よりも学校嫌い傾向が低かった（t(624) = 3.15, p<.01）。

表 2　学校嫌い尺度得点

	標準群	欠席過多群	
	平均値（SD）	平均値（SD）	
学校嫌い尺度得点	16.92 (5.92)	14.09 (5.98)	p<.01

(6) 出席率との相関：出席率と各質問項目の間で 2 変量の相関係数(Peason)を算出した（表 3）。就学関連 8 項目、生活関連 4 項目、健康関連その他が 3 項目の計 15 項目が関連していた。出席率には、極めて多くの事項が関与していることがわかる。

表 3　出席率との相関

		相関係数	
就学関連	科目等への満足度	.066	*
	授業への満足度	.064	*
	学生生活への満足度	.128	**
	総合的魅力度	.143	**
	卒業後の進路	.145	**
	授業内容の理解度	.202	**
	教員への満足度	.070	†
	職員への満足度	.163	**
生活関連	睡眠時間	.119	**
	朝食の摂取	.147	**
	昼食の摂取	.188	**
	夕食の摂取	.140	**
健康他	身体面の健康	.097	*
	GHQ12(精神的不健康)	－.125	**
	大学嫌い傾向	.204	**

† p<.10, * p<.05, ** p<.01

(7) 出席率への寄与：これらの項目を説明変数とし出席率を従属変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行ったところ有意であった（F(8,575) = 11.54, p<.01)。標準化係数（β）は値の大きいものから順に、「授業内容の理解」「昼食の摂取」「朝食の摂取」「大学嫌い傾向」「職員への満足」「教員への満足」「卒業後の進路」であった。これらはすべてが出席率の向上に寄与するものではなく、「教員への満足」は出席率にマイナスに作用していた。また、「学校嫌い傾向」の強さは出

席率の向上に寄与していた。

表４　重回帰分析結果表
（目的変数：出席率）

	説明変数	標準化係数 (β)
就学関連	授業内容の理解	.157 **
	卒業後の進路	.083 *
	教員への満足	−.088 **
	職員への満足	.100 **
生活関連	朝食の摂取	.136 *
	昼食の摂取	.146 **
認知関連	大学嫌い傾向	.103 **
	R^2	.138

* $p<.05$, ** $p<.01$

【考察】

出席率の逆が、欠席過多傾向ということができる。この欠席過多をもたらす要因を見てみると、就学関連では授業内容の理解の不十分さや卒業後の進路の不明確さなど、大学生としての現実的な課題に対するコミットメントが希薄な側面がうかがえる。大学生にとっての授業への出席促進要因は、「高い評価点を得ること」(Friedman et al., 2001) [6]であるとされるが、授業について行けず、また学業の成果が将来のイメージにつながらないことが、欠席過多につながっているといえる。このことは教員への満足が低い、あるいは学校嫌い傾向が強いほど出席率が高まることとも関連している。すなわち、教員、学校という大学としての中核的部分に対し、学生としての不満表明や批判などの明確なスタンスをとれないとき、欠席過多傾向が強まることになるのである。村上(2011) [7]は最近の大学生が「大学入学に意味を見いだせない」「卒業後の見通しが立たない」ことを指摘しているが、さらにはスタディスキルズ・基礎学力などの不足という今日的な課題が相まって学生の修学を妨げ、これが大学生のドロップアウトの要因の一つになっているともいえよう。

生活関連では、睡眠時間が短く、毎日の規則正しい食事事の摂取がおろそかになるなど、欠席過多は生活リズムの乱れにつながっている。生活面の改善は最優先の指導事項であることは明らかであるが、これについては学内での生活にとどまらず家庭との連携が不可欠である。

健康関連では、抑うつ的で心身全般にわたっての不健康傾向が見られる。牧野(2001)[8]は、不登校の要因として「大学生活への満足度」の低さに加え、「無気力」をあげているが、これは欠席過多群において精神的不健康の指標であるＧＨＱ12 得点の高さに反映されているといえる。ただし、このＧＨＱ12 は重回帰分析による寄与項目から除外されている。精神不健康傾向については、さらに検討が必要である。

今回の調査検討にはいくつかの問題点がある。第一に、この調査は授業中に行われたものであり、その時間の授業に出席している学生を対象として実施したものである。欠席過多に関連する事項を検討するという観点から、必ずしも適切なサンプリングとはいえない。授業終了後に、欠席あるいは調査票の提出のなかった学生 200 名あまりに対し別途返信用封筒を添え調査票を郵送したものの、郵送で調査票の提出があったのは１割に満たなかった。授業に出席していない学生にどのようにアプローチするかについて、さらなる検討が必要である。第二に、欠席過多が休退学につながる可能

性についてである。欠席過多傾向が全くないまま休退学となることはまれであり、欠席過多は常に休退学の重要なサインの一つである。大学生にとって一時的な不登校は、ある意味で「健康な営み」(小柳,1999) [9]とする視点も重要であるが、現在の大学の多様化の進展の中では、もはやその視点だけでは十分でない。不登校はあくまで大学生で居ることを続けることが前提であり、それが大学生活を続けられない休退学につながるとなると放置できない。欠席過多にとどまることなく、休退学者にとっての欠席過多の意味等を知ることも重要な課題であろう。第三に、今回の調査は、1，2年生を対象として行ったものであるが、これは3，4年の場合、個々の単位取得状況、必要授業数等が大きく異なり、出席状況の捕捉が極めて難しいことによる。しかしながら、大学に出て来なくなることはしばしば見られることであり、把握の方法をさらに検討する必要がある。

このように多くの問題点を内包しながらも、今回一定の基礎的資料を得ることができた。そして、欠席過多には多くの要因が関与していることが明らかになった。今回欠席過多を、就学関連、生活関連、健康関連その他の事項に関し調査を行ったが、今後はさらに多様な視点から捉える努力が必要である。

〈付記〉本研究は学内共同研究「欠席過多の諸要因に関する研究」として行われた。また、この一部は，日本学生相談学会第29回大会(2011)において発表した。

【文献】

[1] 市来真彦・佐藤哲康・最上澄江・金子糸子： 待つ相談室から働きかける機能を包括した学生相談室への展開, 学生相談研究 29(2), 153－165,2008

[2] 最上澄江・金子糸子・佐藤哲康・布施晶子・市来真彦 : 自ら助けを求めず潜在している学生に対する学内協働による取り組み，学生相談研究 28(3), 214－224, 2008

[3] 河野美江・早瀬眞知子・寺脇玲子 :「気になる学生」調査報告，日本学生相談学会第 28 回大会発表論文集, 106, 2010

[4] 松田美登子 :「メンタルヘルス調査」を退学者対策に繋げるための予備的研究--学生相談室におけるドロップアウト危機の事例を中心に, 学生相談研究 30(2), 136－147, 2009

[5] 蔵本信比古・穴田有一・棚橋二朗・三浦洋 : 北海道情報大生の学生生活の実態と欠席過多の関連, 北海道情報大学紀要 23(2), 37－43, 2011

[6] Friedman, P., & Rodriguuez, F., & McComb, J.: What Students Do and Do Not Attend Classes－Myth and Realities－. *College Teaching*, 49(4), 124－133, 2001

[7] 村山光子 : 明星大学学習支援センターの現状と課題, リメディアル教育研究 3(1)，10－16, 2008

[8] 牧野幸志 : 大学生の不登校に関する基礎的研究(1)： 大学生の不登校と退学希望の理由の探索，高松大学紀要 36, 79－91, 2001

[9] 小柳晴生 : 学生相談の「経験知」，垣内出版，1999